

# 昨年の繭一千四百万圓

## 農村大いに潤ふ

これで天候がよかつたら

は五十二萬四千五百二十三貫(一割三分二厘)を減じたが價額においては繭の値上りで五百七十七萬六千七百七十三圓 實に六割八分三厘の増を見たのである。之を春夏秋蠶にわけると春蠶では三十三萬四千二百一貫(一割五分五厘)を減じたが價額では百七十八萬七千二百八十六圓(三割七分九厘)の増となり、その後引續いての繭價昂騰に夏秋蠶においては十九萬三千二百二十二貫(一割四厘)の産減であつたが價額では三百九十八萬三千三百八十七圓、即ち十割六分八厘の増加となり

### 大に農村を潤し

た、若し之れがせめて前年同様の收穫でもあつたなら、打ち續いた不景氣を緩和し、水害、冷害の災禍にも幾分あきらめがついてあらうに繭の値はよかつたが繭はとれなかつたのだから何しても思ふやうにはいかぬ世の中である、然らばなぜ前年に比して一割三分二厘からも減收したかといふに、主として數年來繭價とかくに面白からず産繭過剩から飼育統制をすら叫ばれるにいたり、一般に養蠶

## おたつ蠶

縣統計課の調査にかゝる昭和十年度の養蠶狀況は養蠶戸數六萬五千七百五十五戸で蠶種掃立數量六百八十萬二千五百五十瓦(内春蠶三百十三萬三千四百四十四瓦、夏秋蠶三百六十六萬八千七百三十六瓦)繭の産額は三百四十六萬二千三百九十六貫。この價額一千四百二十一萬八千七百五十五圓に上つてゐる、その内春蠶は百八十一萬七千六百二十貫(價額六百五十萬七千八百十八圓)、夏秋蠶は百六十四萬四千七百七十六貫(價額七百七十一萬千六百三十七圓)で、夏秋蠶期に入り繭價著るしく昂騰し日に吉報が齎らされたため春蠶に比し收繭高においては二十萬貫から少いが價額においては百二十萬圓から多くなつてゐる。これを

### 前年に比べると

掃立數量において夏秋蠶では二萬八千九百四十四瓦(八厘)を増した春蠶の方で四十五萬七千八百八十三瓦(一割二分七厘)を減じた結果差引四十二萬九千七百八十九瓦(九分九厘)の減となつた。繭産額で

に見切りをつけて掃立を差控へたのと、飼育中の氣候が不順で飼養の経過、桑葉發育二つながら良好でなかつたがためである。左に各

都市別狀況を表示してみよう

郡市名	養蠶戸數	掃立數量			收繭高		
		總數	春蠶	夏秋蠶	總數	春蠶	夏秋蠶
水戸	五九	四、三三三瓦	二、三三三瓦	一、九四〇瓦	二、三三三貫	一、三〇〇貫	一、〇三三貫
東茨城	五、九二六	五五五、一〇一瓦	二五、一〇八瓦	五二九、九九三瓦	二七、一五七貫	一三、一三三貫	一四、〇二四貫
西茨城	三、三〇二	三二七、八八四瓦	一四、七七一瓦	二一三、〇四七瓦	一四、七七一貫	六、七五七貫	七、七一九貫
那珂	三、二一九	三三、一九九瓦	三三、一〇三瓦	二、〇九六瓦	二、〇九六貫	三、一八二貫	四、七六三貫
久慈	三、六〇〇	一五、六六四瓦	二二、四〇〇瓦	八、四三三瓦	一〇、九三五貫	六、二四八貫	四、二四四貫
多賀	八七	三、五五八瓦	七、九六六瓦	一五、六〇二瓦	三、八八六貫	五、〇六八貫	八、七七〇貫
鹿島	三、四九〇	三九七、五八六瓦	一四、九一一瓦	三八二、六七七瓦	一五、九四三貫	六、八三五貫	七、七五八貫
行方	三、二四四	二六、四四四瓦	二六、九六六瓦	一四、〇四六瓦	二九、九六六貫	九、二二六貫	六、八四〇貫
稲敷	七、二五五	八四、六六三瓦	三三、三三六瓦	五一、三二七瓦	三三、八三五貫	二五、八八七貫	二〇、二二三貫
新治	九、九八八	一〇、九六六瓦	四七、七七五瓦	六四、八六三瓦	五、六八三貫	二六、四八七貫	二六、二三三貫
筑波	八、二〇四	九六、七六六瓦	四六、七六六瓦	五〇、〇〇〇瓦	四八、八八九貫	二四、七六〇貫	二四、二二九貫
眞壁	五、〇三三	五三、七六六瓦	三三、〇〇六瓦	二〇、六六〇瓦	二九、二六六貫	一五、三九八貫	一三、三〇八貫
結城	六、二四九	九〇、〇五三瓦	四〇、一一二瓦	四九、九四一瓦	四〇、〇七三貫	三三、七三三貫	二〇、九三三貫
猿島	二、七七一	二六、〇〇六瓦	一三、六三六瓦	一二、三四四瓦	一五、一八〇貫	七、七五七貫	六、七三三貫
北相馬	二、九三四	二七、六六三瓦	一三、〇〇〇瓦	一四、六六三瓦	一四、一七三貫	八、四一〇貫	五、七五六貫
合計	六八、七二五	六八、〇三〇瓦	三、一三三瓦	三、六六六瓦	三、六六六貫	一、八七三貫	一、八七三貫